ツンツンしてた小悪魔妹が嫁になるまでデレた理由
小説 舞麗辞
挿絵 くく維きゃん
立ち読み版

プロローグ　片思いの女の子が義理の妹になった件　006
第一話　義理の妹に下僕扱いされた件　024
第二話　義理の妹との距離がちょっぴり縮んだ件　058
第三話　義理の妹に告られた件　097
第四話　義理の妹と教室で不純異性交遊した件　161
第五話　義理の妹が俺専用泡姫になった件　190
第六話　義理の妹と痴漢プレイでらぶらぶな件　229
エピローグ　義理の妹が俺の嫁になった件　253

登場人物紹介

Characters

アンタみたいな変態が
お兄ちゃんなんて認めないから！

柏木美咲（かしわぎ みさき）

クラスメイトで席も隣同士。
さらに今回妹にまでなっちゃう小柄でキュートな女の子。

浅田公人（あさだ きみと）

美咲にベタぼれの健全少年。
彼女が妹になるなんて、と本来は狂喜乱舞するはずが…!?

第二話　義理の妹との距離がちょっぴり縮んだ件

「そうだ、ケータイで助けを」
思い立って携帯電話を取り出すも、
「無駄よ、ここ通じないもん」
公人がケータイを開くより早く美咲が首を振る。ディスプレイに目を落とせば、なるほどそこにアンテナマークはなく代わりに圏外の二文字が表示されていた。
「……ねえ、これってなにげに結構深刻な事態なんじゃないかな……？」
点灯が消える直前の表示を信じるなら、エレベーターは３Ｆ付近で停止している。
まかり間違ってゴンドラが落下などしようものなら大怪我は必至、打ちどころが悪ければ――ということもある。
しかし可愛い妹はといえばそんなことより義兄と密室に閉じ込められたことにこそ危機感を抱いているご様子で。
「半分よりこっちには来ないでよ…来たらボコボコにしてやるんだから」
震える声で言いながら、ファイティングポーズをとってみせる。どうやらあのスタンガン、外にまでは持ち出していないらしい。
無論やってる本人は大真面目なのだろうけれど、正直逆効果だ。小柄な少女が一生懸命気丈に振舞う様子は抱きしめたいくらい可愛らしく、その気のない公人でさえ少しだけ嗜虐心を煽られてしまう。
「別に何もしないから落ち着きなよ」

とはいえそんな素振りを見せるわけにもいかず、公人はパニック寸前の妹に可能な限り優しく語りかけるものの、

「落ち着いてなんて…いらんないのよ」

義兄の言葉に少女が俯きぎみに呟く。よく見ると顔色が芳しくない。

「もしかして……体調悪いの？」

身を案じ近づこうとするが、先ほどの命令を思い出してすかさず後ずさる。

左右の壁にお互い背中を付けるようにして体育座り。美咲は飛んだり跳ねたりしただけで中が見えそうな丈の短いスカートを穿いているくせに、両手で引き上げられたわずかな布地は彼女のパンツが覗くのを完璧に阻止していた。とはいえ正面きって見つめていようものなら覗き魔扱いされかねないので、公人は明後日の方向に視線を逸らす。

「…っこ……のよ」

わずかな沈黙の後で、美咲がぽつりと何かを呟いた。しかし声が小さく聞き取れない。

「ごめんよく聞こえない――」

「おしっこよっ、おしっこしたいの!!」

聞き返そうとした公人を待っていたのは一転してゴンドラ全体を揺るがすほどの絶叫による尿意の表明だった。

「まったくなぁにが聞こえない、よ！　聞き返すんじゃないわよ、そのくらい雰囲気で察しなさいよ、ほんっとデリカシーないわねバカ公人!!」

やおら立ち上がった美咲はダンダンと地団駄を踏んで声を荒らげる。あれほど青ざめていた顔も怒りと恥ずかしさですっかり紅潮していた。
「あっ、危ないからあんまり暴れないでよ……しかしそれは弱ったな」
彼女の尿意がどれほど切迫しているかわからないが、毛嫌いする自分に催していることを打ち明けたのを見るとかなり切羽詰まっているに違いない。
「そうだ！　アンタ馬になりなさいよ！　それにあたしが乗って脱出するから!!」
そうやって膀胱の鈍い疼(うず)きを紛らわせているのだろう、公人に注意されたあとも小刻みに地団駄を踏み続けていた美咲は不意にパッと表情を明るくしてそう提案してきた。
「脱出って、どうやって……？」
「映画でよくあるじゃない、天井の出口から抜け出すのよ」
彼女が指差す天井の一角には確かに、人一人通り抜けられそうな長方形の窪みが見える。
「それってものすごく危険だと思うけど」
よしんば首尾良くゴンドラの外に出たとしても、階と階の間で停止していたらワイヤーを伝い出口へ飛び移らなくてはいけない。
確かにハリウッド映画のパニックものならお約束のシチュエーションだ。しかしスタントマンならいざ知らず、ただの女子校生にできる芸当ではない。
「つべこべ言わずに、いいからアンタはそこであたしの踏み台になればいいのよっ!!」
ごすっ！

義妹の身を案じる兄であったが、美咲は問答無用とばかりにまたもその脛目がけて容赦ないトーキックを見舞う。

「うぐっ⁉」

たまらず膝から崩れ落ちた公人の背中にズシッと重い衝撃が走る。美咲が土足のまま乗っかってきたのだ。

「上を向いたらお目々がつぶれるわよ」

負荷と共に美咲の忠告が背中の上から降り注ぐ。

しかしその言葉に却って「今見上げたら美咲のパンツが……」と妄想してしまう。ツンツンしてる美咲なら似合うのはやはり縞パンだろうか。それとも漫画みたいないちごパンツか？　いやいやイマドキの子はこの歳でせくしーらんじぇりぃなどというけしからんモノを着込んでいないとも……などとついつい邪念を渦巻かせてしまう。

そんなダメ兄貴の背中では、切迫した尿意のせいでいつも以上に暴力性が増しているらしい少女が仁王立ちとなってバランスを維持しつつ天井へと手を伸ばしていた。

「くっ…ちょっと、もっとリフトアップしなさいよ、届かないじゃないの」

「それは美咲がチビのせいだとおもをごぉぉっっ⁉」

げしぃっ！

公人の失言にすかさずスタンピングを見舞う義妹。容赦ないところを見ると結構身長のことを気にしているのかもしれない。

そんな小柄な少女でも四十キロそこそこはある。帰宅部部長を標榜する公人の体力では、背中に乗った彼女の手が天井に届くところまで持ち上げるのは無理があった。

「あのさ…肩車ならどうにかなるんじゃないの？」

とにかく背中の痛みから早く解放されたい一心でそう提案してみるも、

「肩車!!　アンタそこまでしてあたしのお尻の感触とか味わいたいわけ!?　こんなときに～……ほんとサイアクっ、もーしんじらんないっ!!」

火に油を注いだように烈火の如く怒り狂う美咲によってぐりぐりと足裏で背中を踏みにじられてしまう。

「ひぎぃっ、背骨はやめてっ背骨だけはぁぁっ!!」

そう呻きつつ渾身の力を込めて膝を伸ばし美咲を更なる高みへと持ち上げる。まったく情けないことこの上ない。これじゃまるで鞭を入れられた競走馬みたいではないか。

（しかしそうか……肩車したら首に美咲の下半身の感触が味わえたのか…無念）

失われたチャンスに今更気づき、胸の中で軽く舌打ちする公人。

「なによっ…どうやって開けるのよ、これぇっ……」

そんな義兄の背中では可愛い妹が悪戦苦闘していた。無事天井へと届きはしたようだが、本来の出入り口でない場所を素人が簡単に開いたり閉じたりできるわけもなく、ひたすら四苦八苦しているみたいだ。

汝天を仰ぐべからずの戒律を申し渡された公人には確認できないが、どんどかと天井を

叩く音が響き渡り、そのたび世界がぐらぐらと揺れた。
「ねえ、もう諦めたほうがいいんじゃない？　きっともうすぐ助けも来るだろうし――」
「もう少し、もう少しで開く気が……きゃっ⁉」
あきらめきれない美咲の声が弾けるような悲鳴に変わる。同時にぎりっ、と背中を激痛がえぐった。次の瞬間一気に身体が軽くなり……。
どでんっ‼
後頭部に鈍い衝撃が走り、同時に世界が闇に閉ざされた。
痛い！　重い‼　しかしそれを補って余りあるほどに――超気持ちいい‼
はちみつレモンみたいに甘酸っぱい匂いが一気に胸を満たす。首周りには温めたプリンみたいな感触が密着していた。
確認するまでもない。足を踏み外した美咲が首の上に馬乗りになっているのだ。
（だとすると、うなじの辺りに当たるこの一際熱を孕んだぷにぷに感は、布一枚隔てた美咲の――‼）
全神経を首の裏に集中させつつ、同時に間もなく降り注ぐであろう罵詈雑言に公人が身構えていると。
「やだ…もう我慢、できないっ……」
てっきり怒鳴り散らすものと思っていた美咲は虫の息でそう呻くや、こてんっ、と転げ落ちるようにして公人の頭の上からずり落ちた。

目の前に転げ落ちた義妹はでんぐり返しをしようとして失敗、みたいな頭から床に突っ伏す姿勢だ。自然と突き上げる形となったお尻はスカートが捲れ上がってパンツが丸見えになっている。先ほどから散々妄想したその場所にあったのは縞パンでもセクシーランジェリーでもなく、まさかのネコさんバックプリントであった。

（バックプリント、しかもキャラクターモノって……だから小学生かお前はっ!!）

目と鼻の先でプリンと突き出されたお尻に心の中でツッコミを入れる。

だが当の美咲はそれどころではない。

「やっだ…もう無理っほんとムリぃぃっ…もっ、でちゃ……あああぁぁ……!!」

ぷしっ！

美咲が泣き出すような声をあげるとほとんど同時に、缶コーラのプルタブを開けたときみたいな小気味よい破裂音が目の前で弾けた。

それに続いて。

ぷしゃあああああああぁぁぁ――――――っっ!!

激しい水音が目の前のショーツの内側で爆ぜた。ぷっくりとした股布部分からお尻全体が一気に水浸しになり、脇のゴム部分から内股へといく筋ものしたたりがこぼれ落ちる。

「だめとまらないっ、とまらないのぉっ……こっバカ公人こっち見るなっ！　耳もっ、耳も塞いでなさいよこのばかあああっっ!!」

体勢を立て直す余裕さえないのだろう、尻を突き出すはしたない姿勢のまま美咲は必死

になって泣き喚く。
しかし背後で未だ馬の姿勢を保つ公人の耳にその命令は届いていない。だって手を伸ばせば触れる距離で片思いの女の子がお漏らししているのだ。目の前で繰り広げられる痴態に公人は完全に気持ちを奪われていた。
瞬く間にぐしょ濡れとなったショーツは陰裂の形がくっきりと透けて見えるほど股座にぴったりと貼り付き、堤防の役目を失ったクロッチからはまるでポットから温かなお茶が注がれるかのように勢いよく檸檬色の水流が地面へ向け注がれてゆく。水しぶきを床にしたたか打ち付け、辺り一面にほのかな甘味を含んだアンモニア臭の湯気をくゆらせていた。
(こ、これが美咲のおしっこの匂い……なんでこんな甘くていい匂いがするんだッ!?)
以前図らずもトイレを覗いてしまったときは一瞬すぎて感じなかったが、妹の漏らす尿は紅茶のように芳しい。男女で尿の成分が違うなどという話は聞いたことがない、だから物理的には自分が毎日排出しているものと変わらないはずだ。
しかし気になる女の子の恥ずかしい匂いを嗅いでいる——そんな脳内補整のためか美咲の匂いはまるで媚薬のように公人を刺激し、一嗅ぎしただけで下半身が一気に充血した。
「いやぁっ…もう、とまれぇっ…えぐっ、お願いっ、もぉぉとまってぇぇっ……!!」
美咲の悲鳴も既に涙声だ。ショーツからはみ出した尻房はスプーンで突いたプリンみたいに小刻みに震え、滑らかな桃肌は恥ずかしさのせいで太腿に至るまで粟立っている。恥辱に震えながらも漏らし続ける妹の姿も、恐ろしくエロティックだった。

我慢に我慢を重ねていたのだろう、泣いても叫んでも美咲の放尿はとどまることなく一分近く続いた。山吹色の水溜まりは床を侵食してそこに手をつく青年の指先をも濡らす。

（うわぁっ…美咲の、すごくあったかい……!!）

美咲の体内で、好きな女の子の膀胱で温められアソコから排泄された恥ずかしい体液が掌を濡らしている――そう考えるだけで股間がまた強く疼いた。

「ふぁっ……んっ…はぁぁ……」

彼女にとっては長い長い屈辱のときだったろう。ようやく用を足し終えた美咲は生気を抜かれたような嘆息をついた。

幸か不幸か、失禁にびしょ濡れのニーソックスはくまなく浸水したため、黒色が深くなっただけで却って目立たない。スカートも放尿の瞬間は盛大に捲れ上がっていたため浸水の被害を受けずに済んだ。もっとも、おかげでスカートまでは濡らすまいと美咲はチェック柄の布地をからげて立ち上がる羽目となったが。

つまり目の前の美咲は相変わらずのパンツ丸出し。それでも見るなだのバカだの言ってこないのは、まあ彼女も気まずいからだろう。実際スンスンと鼻を啜る音も聞こえてくる。

とはいえこのままお互い無言では気まずさに拍車を掛けるばかりだ。軽い口調でこちらから話を振るべきだろう。

「まあともあれこれで当面の危機は脱した――」

ガタンッ!!

ちゅうぅっ…ぬろっぬろれろぉっ……!!
放射皺にキスするように、括約筋に沿って唇を這わせチュッと押し当てる。
「ふひゃんっ!?」
後門にキスした瞬間、尻尾を踏まれた子猫みたいな悲鳴が美咲の口をついて出た。同時に艶やかだった尻房一面にサッと鳥肌が浮かびあがる。
「やっぱり今日の美咲ヘンだよ、どうかしたの？」
「ふえっ、そんなことないよ…夏風邪でくしゃみが出るんだって」
外に向けてはそうエクスキューズしつつ、
「へっ変態っどこ舐めてんのよバカ公人っ……!!」
例によって顔をこっちに向けぬまま、美咲は怒りの声をあげる。
「どこって、美咲のウンチの孔」
度重なるバカ公人扱いにむっとして、わざと下品な物言いをしてやる。
「はっ、恥ずかしいこと言うなド変態ッッ!!　このキチ〇イっ、スカトロマニアッッ!!」
恥ずかしさが頂点に達したらしい妹はあらんかぎりの罵声をぶつけてくる。
しかし公人は引かない。だってこんなところ、恋人になったってそうそう触らせてもらえない。この機に飽きるほど堪能せねば――むっちりとしたお尻を抱え込んで、公人はじっくりと時間をかけて妹の肛門を舐った。
ぬりゅっ、ぬこっ、ぐぬぷぅっ……!!

「うあっ…や、だっ……舌っな…か、入って…しっ…しんじらんないっ……」
最初は嫌がっていたものの、放射皺の上で舌をぬりゅぬりゅと蠢かせているうちに喘ぐ少女の声色も段々と艶を帯びてゆく。
「どうした美咲？　まさかお尻で気持ちよくなってきちゃったのかな？」
ぬぷんっ、と舌を引き抜き、尾てい骨をしゃぶるようにキスしつつ意地悪く囁いてやる。
「ちがっ、お尻でなんて感じるわけないでしょ！　ホントばっ、ばっかじゃないの!?」
「じゃあもっと奥まで舌差し込んでも大丈夫だよな」
妹の言質（げんち）をとった公人は鼻先を尾てい骨に押し付け、割り開いた尻房の内側に頬を擦り付けて。ぴんと伸ばした舌先で、少女の綻んだ桃孔を深くえぐりだした。
ぬぐぅっぬりゅっぬぽぉっ！
「ふひゃぁっ!?　ひゃめっおひりのにゃからめぇっ!?」
深い突き込みに一気に少女の声が蕩けた。経験の極めて浅い公人にも、それが不快感からくる悲鳴でないことはわかった。実際妹の直腸は舌を突き込むごとにびくびくと痙攣し、腹奥から透明な腸液を溢れさせている。
「ほら、じゃあ本当のことを言ってごらん。美咲はお尻で気持ちよくなってるんでしょ？　ウンチの孔で感じちゃう、とっても恥ずかしい変態さんなんだよね？」
「ちがうっ、違うわよぉ、あたし変態なんかじゃ……ひんっ」
嘘つきな妹を罰するように、しとどに濡れた桃孔へフッと吐息を吹きかける。気化熱の

刺激に舐められた美咲のそこは指で触れたオジギソウみたいに瞬時にキュンと窄まった。
「認めないとやめないよ？　このままじゃ友達の前でお尻でイッちゃうかもだぞ……ああ、気持ちよくないんだからそんな心配ないのか」
桃溝をべったりと舐め上げながらの脅迫は、妹の強情を突き崩すには充分だったようで。
「ううっ……言うわよ、言います、あたしお尻で感じてますっ!!　……これで満足でしょ？　これ以上されたらホント、やばいよぉっ……」
観念した美咲が早口でまくし立てる。
「よしよし、正直に答えたのに免じて許してやろう」
妹の告白に満足し、ようやく肛口から唇を離す。唇を離した肛門口は先ほどまでの澄まし顔とはまるで別人。赤く染まってふやけきり、ふっくらと膨れた様は未熟な女陰より卑猥に見えた。舌の名残を惜しむようにくぷくぷとはしたなく収縮を繰り返す桃孔を見ながら、公人はベルトを緩めチャックから既に硬く屹立したペニスを取り出す。
「ちょっと、なにチャック開けてんのよ……まさかこんなところで――」
正面を向いたままの美咲も、その音から兄が下半身を露出したのを気取ったようだ。不安げな声を漏らしたが、その声には同時に甘い色も滲んでいるように公人には聞こえた。
ちゅぷっ……！
だから。妹の懸念とその裏に透けて見える期待を裏書するように、公人は薄桜色の陰裂へと亀頭の先端を差し込む。

肛門への愛撫は間違いなく彼女の性感を刺激したようで、妹の股座に息づくぬかるみは驚くほど潤み蕩けるように綻んでいた。美咲の外と胎内との境目は、相変わらず燃えるように熱い。

「ひゃぅっ…こっこらっそれ以上はホント許さないわよっ…だっ、やめなさいよぉっ!!」

腰を左右に揺さぶって、美咲はどうにか公人を振り払おうとするが、意地悪な兄はその腰をしっかりと捕まえそれを許さない。

それに。上の口では嫌がっておきながら、下の口は密着した亀頭にまるで吸盤みたいにチュッと吸い付き奥へ奥へと誘おうとしていた。

ずぷっ…にゅるぷずぶずぶぷぷぅぅ――――――っっ!!

そんな美咲の無意識のご期待にお応えして、公人はグイッと強く腰を繰り出し灼熱の華を割り開く。丹念な口唇愛撫にほぐれきった肉穴は初めてのときが嘘みたいに柔らかく、飲み込むようにして勃起を根元までずっぽりと咥え込んでしまう。

「んひゃはわわぁぁっ!?」

一思いに串刺した途端、妹は肺の空気を一気に放出するような喘ぎを吐き出した。

「ちょっと美咲ぃ、ホント大丈夫？　保健室行ったほうがいいんじゃないの？」

「あっ…あ、あたしっ…がぁ？　別にィっ…ぜっ全然へーきだよぉ？」

それは嘘だ。背後へと回された美咲の掌は公人の手首をぎちぎちと握り締めてくる。挿入だけで軽く果ててしまったようだ。膣内は感電したかのようにびくびくと踊っている。

「痛くない？」
それでもお互いまだ二回目。やっぱり心配で、小さな声でそう尋ねてみる。
「んっ、それはっ平気…っていうかそんな気遣いするならこんなこともうひゃめぇっ⁉」
美咲が苦痛を否定した瞬間、公人は抽迭を開始した。
痛くないなら遠慮はいらない、初めてのときと違いその腰使いはのっけからフルスロットルだ。まあただ単に美咲の匂いと味に興奮しきって自制が利かないだけなのだが。
ずぶっ！　ずぶんっ！　ずぶずぶずぶぅ――――っっ‼
肉洞内部は相変わらずの窮屈さだったが、この前と比べると段違いに柔らかかった。前戯に時間をかけたためか内部は熱く潤んでおり、抜き挿しもスムーズだ。
「はぁっ、んっ…うぁっ…はぁんっ……‼」
立ちバックの体勢もこの前の正常位より遥かに腰を振りやすかった。女子の見てる前で、ケモノじみたポーズで妹を犯している――自らの置かれた背徳的なシチュエーションにますます興奮した公人は、美咲の可愛らしい尻を抱えて一心不乱に腰を繰り出し打ち付ける。
パンパンパンパンパンパンパンパンッッ‼
公人の下腹部と美咲の尻肉が打ち合い、肉の爆ぜるような甲高い音が室内に響く。
「なにこの音…なんか叩いてる音がしない？」
「そ…そぉお？　とっ、隣のクラスでっ…んっ…こっ黒板消しでもぉっ…ぁっ…たっ、叩いてるんじゃないっ⁉」

（いや今の返しはさすがに無理がありますよ美咲さん）

心の中でそう突っ込みつつ、腰は彼女を犯すのをやめない。抜き挿しを繰り返すたび美咲の中はより一層蕩けるように潤んでほぐれ、温かな肉壁がぐにゅぐにゅとペニスに絡みついてきた。深く貫き天井に亀頭の先がぶつかるたび、妹の穴はぎゅぎゅぅっ……と収縮して竿を締め付けてくる。反対に引き抜こうとすれば膣粘膜がペニス全体にぴっちり吸い付いて離そうとしなかった。

（うおっ美咲の膣内（なか）…初めてのときよりもっとずっと気持ちいいっ……!!）

成熟した妹穴の食い締めに感嘆の呻きを漏らしながらも、公人の視線は二人の結合部のわずか上――先ほど味見した、ピンクの放射皺へと向けられていた。

そこは抽迭のたびひくっひくんっと収縮を繰り返している。そのはしたない蠢きはまるでこちらにもペニスを咥えさせてとせがんでいるかのようだ。

（さっきも反応悪くなかったし……もう少しいじめちゃおうかな）

悪戯心を起こした兄はその蠢きに誘われるまま、桃房に添えていた掌を尻溝へと滑らせヒクつく肛門に親指を押し当てる。

ぐにゅぅぅっ!!

放射皺の中心に指を押し付け軽く力を込めると、窄まりはまるでほどけるようにして指先を一気に第一関節まで飲み込んでしまった。

「んあぉっ……!!」

肛門を穿たれた美咲は喉が詰まったように鈍い呻き声を漏らす。後孔への刺激はすぐそばでペニスを咥える膣肉にも変化をもたらした。食い締める括約筋の動きに呼応して、肉壷もまたきゅうきゅうと剛直を締め付けてくる。

美咲の恥ずかしい場所を弄んでいる――自らの変態行為に興奮した公人もまた、ますます腰使いを速めた。

ズブッ、ズブッ、ズブッ、ジュブゥッ――――――!!

肉と肉、粘膜と粘膜が擦れ合い、溶けあって。痺れるような喜悦がペニスから下腹部全体へ波紋となって広がった。

「みさ…き……もう、膣内に出るっ……!!」

「ちょっまっ…いまされたらっ膣内に射精(だ)されたらあたしまでっえぇっ……!!」

戸惑いの声をあげる妹はしかし、同時に肉棒をギチギチと食い締めて射精を誘う。

もう限界だ――そう感じた瞬間、公人は桃孔に突き入れていた親指をズブリと根元までねじ込んだ。

「きゃひぃぃんっっ!?」

その瞬間、尻尾を踏まれた子猫みたいな悲鳴と共に肉壷がギュウウッ！　と肉根を絞るように収縮し、公人は限界を突き抜けた。

「くっ…でっ、射精るっっ――――!!」

どびゅっびゅくっどぷっどぷっどぷっっ!!

「んひゃわぁあぁぁっ、やっあはぁぁぁぁ――――……♥」
初セックス以来溜め込んでいた塊のような精液が、輸精管を潜り抜けて美咲の胎内へドクドクと注ぎ込まれる。二人の性器が融け合うようなすさまじい快感に腰が砕けそうだ。
それを子宮で受けきった美咲もまた絶頂に達したらしい。散々食い締めていた口元がほどけ鼻にかかった媚声が緋色の空へと吸い込まれる。
初めてのときも思ったが、感極まったときに溢れる美咲の恥声はかなり大きい。これはさすがに、眼下の女子も事態に気づいてしまったのではないか？
射精の甘い倦怠感にとらわれながらも、妹の肩越しにおっかなびっくり窓から顔を出してみると――そこにはもう人っ子一人いなかった。
「ふーっ、ふーっ……みんな、もうとっくに行ったわよ。そうじゃなきゃあんな声出す前にあたし、名誉のために舌噛んでるっての」
夕焼けの緋色の中でもわかるほど顔を紅潮させ、小鼻を膨らませて発情猫みたいな吐息を漏らしながら呆れたように呻く美咲。緩んだ頬やおでこの上に転がる汗の玉が緋色に輝いて美しい。
「それに合わせて美咲もイッたというわけか、ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!」
ほっとした勢いで父譲りの小粋なメリケンジョークを口にするも、
「今度エッチの最中にそーゆーくだらないこと言ったらボコボコにしてやるからね」
振り向いた美咲は眉をひそめかなり不機嫌そうな表情で忠告する。

「……すいません以後気をつけます」
雰囲気を重んじる女の子相手に今のはさすがにヒドイよな、と自分でも反省。射精したてで敏感すぎる陰茎をこそばゆさを堪えつつ膣から引き抜く。
にゅぷっ…るっ……ぐぷっんっ！
「ひゃうっ…んっ♥」
敏感になっているのは彼女も同様らしく、亀頭を膣から引き抜くと妹が可愛らしい鳴き声を漏らす。ペニスを完全に抜いた途端、樽の栓を抜いたみたいに公人の精液と美咲の愛液の混ざり合ったまだらな乳白色の粘液がクレヴァスから溢れ出た。
「あ、そのままにしてて……拭いてあげるから」
あやすように言いながら、ポケットティッシュを取り出してヒクつく少女の陰裂をそっと拭ってやる。
「やだ…自分で拭くわよぉっ……これじゃあたし赤ちゃんみたいじゃない」
恥ずかしがる美咲だが口先だけで身体は公人にお任せ状態、陰裂をなぞるたび紅潮しきった桃尻をぴくんっと可愛らしく跳ねさせている。
「ほら、綺麗になったよ」
言いながら自分で脱がせたパンツも穿かせてやる。赤ちゃんは言いすぎだとしても、幼い妹がした粗相の後片付けを世話しているみたいで、なんとも背徳的な感じがした。
「も、もうっ……こんなとこでこんなことするなんてサイアクっ、信じらんない!!」

「んっ、はっ…あっ……やぁんっ」
切なそうな表情を浮かべる美咲が腰を前後させるたび、くちゅっくちゅっと淫らな粘音がかき鳴らされる。股座と腿の間では白く濁った粘液が幾筋にも糸を引いているのが見える。太腿の上に跨がる妹の股座はぐっちょりと熱く蕩けて、明らかに石鹸とは違うぬらつきを公人の腿へと塗りつけていた。熱く蕩けた股間で唯一尖るように自己主張する感覚。今やクリトリスが勃起しているのさえはっきりと感じ取れた。
「こら美咲、お客様より先に感じちゃだめだろ」
妹の発情を察知した兄は太腿をずりずりと前後させ意地悪く囁いてやる。
「ひゃぁっ、あっ脚だっ…お客さんならじっとしててよぉっ……」
すると口ではそう反論しつつも、美咲は腰が抜けたみたいにどっしりとお尻を腿に乗せ、公人の肩に抱きついてされるがままになった。
目の前には美咲の胸、激しい腰の揺さぶりにもしかしそこはあまり動じない。
（美咲の胸はホント揺れないなぁ……だから体育祭の百メートル走とか速いのかな？）
こんなこと言ったら怒るだろうな、と思いながらも目の前の微乳を眺めていると。
「何見てんのよっ……どうせ全然揺れないな、とか思ってるでしょ？」
ドキドキドキィッ!!
口に出してないのに、美咲は思いっきりヒトの心を読んできた。
「いや、あの…なんていうか……動かざること山の如し？」

「フン、だ。どーせ貧乳ですよせいぜい砂場の砂山ですよあたしの胸はっ!!」
あまりの勘のよさに驚き、フォローの言葉も空回り。あれよあれよという間に妹様のご機嫌を損ねてしまう。
「でっ、でも俺は好きだけどね、ちっちゃくて可愛い美咲のおっぱい」
言って彼女のひかえめな乳峰をふんにゅりと掬い上げてやる。
「ひゃっ…それって単にお兄ちゃんがロリコンなだけじゃないの」
フォローのつもりで放った言葉にも、ジト目で呻く無毛少女。
「おっぱいだけじゃないぞ。ぽっこり突き出たこのお腹も、つるつるして気持ちいいあそこも、ちょっと大きめのお尻だって。美咲はどこもかしこもすごく魅力的だよ」
ロリコン呼ばわりにもめげず、妹を慈しむように抱きしめ耳元で囁く。
「ぽっこりお腹ってゆーなぁっ!!　いいわよいいわよ、どうせあたしなんて胸はない下の毛も生えてない、おまけにお尻ばっか大きい寸胴お子様体型だもんっ!!」
公人的には褒めたつもりだったのだが、兄の言葉に美咲はぷうっと風船みたいに頬を膨らませる。そうやって頬をりんご色に紅潮させむくれて拗ねてるのが、なにより一番子供っぽいのだが……。
「美咲がお子様体型だって、俺が魅力的だって思うんだからそれでいいじゃないか」
むくれる妹を愛おしく思いつつも、なんだか彼女が自分以外の男の目を気にしてるみたいで。少しむっとした公人は語気を強める。

「そ、そりゃそうかもだけどさ……でもやっぱり可愛い服の着こなしとかにはそれなりに胸があったほうがいいんだよ。着替えるたびブラにパッド入れるのって、結構惨めな気持ちになるよ？」

（って美咲のヤツ、普段パッド入れてたのか……）

てっきり着膨れしているだけだと思っていたのだが……やはり女の子はオソロシイ。

「それにやっぱり赤ちゃんには自分でおっぱいあげたいし――妊娠したらちゃんとおっきくなるのかな？」

言って不安げに眉を八の字に寄せて、自らの慎ましい胸元へと目をやる美咲。

（あ、一応そういう心配もしてるんだ――ふっ、可愛いヤツめ）

「――わかった。じゃあ大きくなるように俺が揉んであげよう」

そんな健気な妹を前に。公人は決意を打ち明けるようにして厳かにそう告げた。

「……いや、どうしてそうなるのよお兄ちゃん？」

兄の提案にしかし、美咲は明らかに猜疑（さいぎ）心に満ちた半眼でこちらを見てくる。

（ちっ、雰囲気で誤魔化されなかったか）

内心舌打ちしながらもその表情は真面目な様子を崩さない。

「決してやましい気持ちからだけじゃないぞ。昔から女の子の胸はたくさん揉まれると大きくなるって言うじゃないか。きっと刺激に女性ホルモンの分泌が活性化するんだよ」

冷たい視線にもめげず、迷信を駆使し口からでまかせで無理やり理論武装してみる。や

ましい気持ちから〝だけじゃない〟と付け足すところが兄ギリギリの誠意である。
「そうなの、かな……じゃあお兄ちゃん、マッサージ…してくれる？」
するとそんな誠意が通じたか、それともしたり顔が功を奏したのか。美咲はいぶかしむような目つきながら、効果があれば儲けものといった様子で兄の提案を受け入れた。
「だ～いじょうぶっ、まーかせて!!」
二つ返事でそう返すなり、まずは向かい合う妹を膝に乗せるように座り直させる。親がまだ小さな子を膝に乗せてやるような感じだが、意地悪な兄はさり気に妹の足と足の間を膝で割って股を開かせてしまう。むにぃっと柔らかく温かな桃尻が股間を押しつぶすように乗ってきて、その感触だけで股間が深く疼いた。
「もう、またおちんちんおっきくしてぇっ……お兄ちゃんアヤしすぎっ」
お尻で勃起を感じ取った美咲が、やっぱ騙された、とばかりに呻く。
「まあまあ。それじゃさっそく兄が豊胸マッサージを施してしんぜよう」
そんな妹を適当にいなした公人は勃起ペニスをお尻に擦り付けたい衝動を抑え込み、腋の下から少女のコンプレックスの元を掬い上げるように包み込んでやる。
確かに小ぶりだが、美咲のそこはしっかりと女の子の胸だった。ふんわりとした感触は蕩けるような心地よさ。掌のちょうど真ん中辺りには硬いしこりのような感触が触れている。水を張った風呂場の冷気のためかはたまたこれから行われる行為への期待からか、既に軽く乳首を勃起させているようだ。

むにっ、むにぃっ、くにぃぃ……！
小さな胸を手の中で転がすように、やわやわと刺激する。
「あっ…き、きもちっ…い、い……」
優しい刺激に美咲が目を細める。その反応を見ながら公人は徐々に指に力を込めてゆく。ぐにぐにと乱暴に揉んでやると指の間から幼峰が白玉みたいにぷにっと顔を出した。
「やっ…刺激強いっ……そんなされたら胸っつぶれちゃうぅっっ……!!」
激しさを増す乳按摩（あんま）に腕の中の妹が鳴き声を漏らすが、痛がっている様子はない。掌に触れる乳突起も公人の手を突くように硬さを増し肌を刺してくるかのようだ。
「どうした美咲、揉みほぐしてるのにさきっちょ硬くして」
ツンッと尖った乳頭を指で摘んでキュッと引っ張り上げてやる。
「ちっ、ちくびぃぃっ…んぁっ、乳首はぁっ、いっま…関係なっあっはぁぁんっっ…」
軽く引っ張っただけなのに。それまでの肩を揉まれているときみたいな反応から一変、妹の声は一気に蕩けた。吐き出される吐息からは力が抜け、背筋も骨を抜かれたみたいにぐにゃりと弛緩し始める。摘んだ乳勃起を更にくにくにと扱いてやれば、乳首のみならず乳輪までもが充血し徐々にぷっくりと膨れてきた。
「いや、全体的に血行がよくなったほうが栄養が行き届いて成長を促すに違いない」
もっともらしいことを嘯きつつ、兄は更に幼乳を責め立てる。
親指と中指で突起を捉え、人差し指でもってでこピンの要領で勃起乳頭をピンッピンッ

と弾いてやれば、
「んやっ!!　きゃひっ!!　やめ…ひゃふんっ!!」
そのたび美咲は身体全体に高圧電流を流されたかのようにビクッとお尻を跳ねさせた。
「こんなの絶対うそぉっ、こんなんじゃぜったい胸大きくなんかなんないぃ……!!」
乳首周辺を弧を描くように爪でカリカリ刺激されながら、切なそうにかぶりを振る。
「じゃあ胸全体をもっと丹念に揉みほぐしてやろう」
妹の抗議もどこ吹く風。公人は先ほど美咲が湯に溶いていたローションを洗面器から掬い取るや、掌に馴染ませ幼峰へと絡ませる。
ぬるっにゅるにゅるにゅる〜〜っっ!!
「ひゃっ!!　なにこれぇっ…ヌルヌルしてすごっ…かっ感じすぎぃっ」
初めてのローションの感触に、美咲が戸惑いの声をあげる。ぬらつく乳肉の感触は指先が蕩けるほど気持ちいい。しかも粘液を纏った乳球は風呂の照明の下でてらてらとふしだらに艶めいてまるでそこだけ粘膜質に、新たな性器に作り変えられたかのようだ。
「うわぁエロいな美咲…こんなべとべとに濡れて、まさにおっぱいま○こって感じだな」
そんな乳性器を兄はむにむにと力任せに揉もうとするが、幼乳はぷにゅんぷにゅんと逃げ惑い、掌に温もりと柔らかな感触だけを残してこぼれ落ちてしまう。
「ほら美咲、こうしたらもっと気持ちいいんじゃないのか」
にゅるっ、ぬりゅりゅっ、むにゅりゅっ、ぬるぬるぬるぅぅぅ〜〜〜っっ!!

公人は淫らに濡れ光る乳峰を掌の中で弄びつつ、ぬらつく勃起乳首に五本の指の感触を覚え込ませるように一本ずつ擦り付けてゆく。
「ひゃはっ♥　やだお兄ちゃっ指動かしちゃ…うひっ♥　ゆびらめっ、おっぱいそれひゃめへぇぇっっ♥」
美咲の感じ方は尋常ではなかった。年頃の乙女としてはいただけないレベルのえげつない喘ぎを漏らし、公人が軽く動くたびに全身をはしたなくびくつかせる。そんな反応が面白くって可愛くて。公人はついつい調子に乗って美咲の胸をさらに苛めにかかる。
甘食みたいな幼乳の峰を摘んで押し出し、ぷっくりと丸く膨れた先端を人差し指と中指で摘み、こね、弾き、ぎゅうっと押しつぶす。公人の指の先で妹の乳頭は心臓の鼓動がわかるくらい激しく脈打ち、ビキビキと音を立てそうなほど激しく勃起を増していた。
「うひんっ…いひっ…よぉぉ……!!　乳首っおっぱいの先が切ない…よぉっっ!!」
はしたなく乱れる妹を前に、彼女をもっと鳴かせたい欲望にとらわれる。責めは特に敏感な勃起乳首へと集中し、その愛撫も敏感突起を引っ張り上げたり抓(つね)ったりと乱暴なものへとエスカレートしていった。絶え間ない刺激に乳首だけでなく乳輪全体がぷっくりと膨れ、色も淡い薄紅色から充血によって鮮やかなピンクへと染め替えられてゆく。
「やらやらっもっとやひゃひくっ!!　くひゅぐっひゃいおっ、おひゃっ…おかひくなっひゃうよぉぉっっ!?」
ぐりっ、ぐりいいいっ……呂律(ろれつ)が回らないほどはしたなく喘ぐ美咲は、こちらが触れて

いない腰まで揺り動かしてくる。腰が蠢くたびくちゅっくちゅっとはしたない音が妹のクレヴァスからかき鳴らされ、火傷しそうなほど熱い蜜が公人の太腿へと滴り落ちた。
「んひゅぅっ、ひっひはぁっ♥　おっぱい蕩けちゃうぅっ…あひぇっ、だめらめぇっ、ばかになるっ気持ちよすぎてあたひおばかになっちゃうぅぅっっ♥」
真っ赤に紅潮した頬を弛緩させバテた犬みたいにべろりと桃色の舌を垂らして。美咲は大きなつり目を泣きそうなくらい潤ませ喘ぎ狂う。
蕩けたような表情、とはこういうのを言うのだろう。
（うわっ美咲、完全にアヘ顔だよ……エロすぎだろ）
この分なら胸だけで果ててしまうかもしれない——そんな淫らな妹の姿を見てみたくて、公人は更に按摩をエスカレートさせる。胸を裾から搾るように握り締め、破裂寸前の風船みたいに丸々肥えた幼乳を力いっぱい抓り上げた。
ぎゅぎゅぎゅぅぅ——っっ!!
「ひはぁぁんっ、いっくぅっっ…おっぱいだけでっあたしおっぱいだけでいっちゃうぅぅぅぅっっっ!!」
瞬間、美咲が限界を告げる嬌声をあげた。腕に抱いた細身が落雷を受けたようにビクンと踊り、膝から一瞬桃尻が跳ねる。本当に乳首だけで絶頂してしまった。浴室いっぱいに妹の甘酸っぱい牝の匂いがたちこめる。
「はぁっ、はぅっんっ…んぁっ、はぁっ、はぁぁ……」

腕の中の妹は胸で果てた後もしばし荒い息を繰り返していたが、しばらくして呼吸が落ち着いてからも顔を伏せだんまりを決めこんでいた。

きっと顔を見られるのも恥ずかしいのに違いない。

「おいおい、胸マッサージされただけでイっちゃったのか？　本当やらしいな美咲は」

そんな彼女が可愛くて、顔を覗き込んで無理やり目を合わせると、

「……もうっ、お兄ちゃん調子に乗りすぎっ!!」

顔を上げるや頬を真っ赤に染め上げた妹は、ぽかぽかと兄の胸板を叩いてきた。これが彼女のよく言っている「ぽこぽこにしてやる」というヤツなのだろうか？　正直まったく痛くない。どころかちっちゃな子が駄々をこねてるみたいで可愛らしくすらある。

「はいはい俺が悪かったって…ほら、身体洗ってやるからそのままおとなしくしてろよ」

おかんむりの妹を抱き寄せて、シャワーで泡とローション、絶頂でぬめる陰部を丹念に洗い流してやる。まったくこれではどちらがご奉仕しているのかわかったもんじゃない。

続いて自分の泡とそれ以上にたっぷり塗り込められた美咲の愛液とを洗い落とすと、お互い汗が引かないので一旦水風呂へと浸かることにした。

「ひゃっ…冷たくてきもちいいーっ♥」

ザブンッ――公人が浴槽に浸かると、すぐさま美咲が被さるようにして上に乗ってきた。二人分の容積に冷水がざぶんと溢れ出す。水中で触れ合う妹の身体は羽みたいに軽く、それでいて水の冷たさのおかげで美咲の温もりがより強く感じられた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!